春国岱の四季（しゅんくにたい）

川崎慎二

かわさき・しんじ
1967年茨城県生まれ。1990年3月、日本動物植物専門学院金沢校卒業後、石川県白山自然保護センターへ入所。半年間来館者対応などの仕事をし、同年10月に財団法人日本野鳥の会入社。加賀市鴨池観察館、東京港野鳥公園でレンジャーを歴任し、1994年4月、根室市春国岱原生野鳥公園ネイチャーセンターの開館準備のため根室に赴任。翌年、同センターの開館と同時に研究員として現在も勤務。

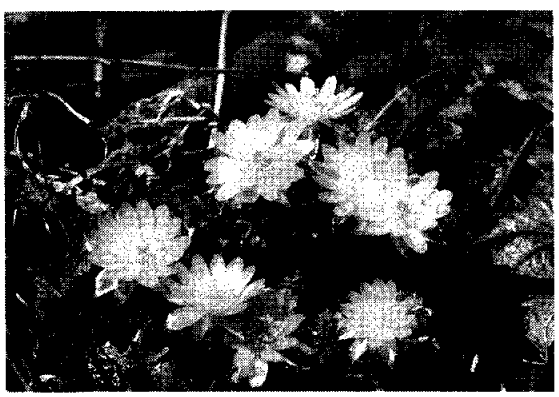
本文の要点

原生自然が今も色濃く残る春国岱は、根室半島のつけねにある広さ約六百ヘクタールの広大な砂州で、野鳥の宝庫として知られています。春国岱とのつきあいはもう五年になりますが、その短いつきあいの中で四季それぞれに印象に残ったできごとを紹介し、春国岱のすばらしさを伝えられたらと思っています。

春

日本一桜の開花が遅いと言われている根室ですが、春の息吹はすでに三月中旬ぐらいに感じることができます。雪解けの始まった森を歩くと、ざらめのような雪の絨毯の中から、ぽっこりと顔を出しているフクジュソウの姿があることに気づきます。フクジュソウは雪の下でつぼみとなり、すでに花を咲かせる準備をしているのです。雪解けが進むにつれフクジュソウは背を伸ばし、三月の終わりには太陽の光をいっぱいに浴びて黄金色に輝く美しい花を咲かせます。実は、私が野生のフクジュソウを見たのは根室に来てからが初めてでした。それまでは、とても数少なくなってしまった植物で、そう簡単に見ることはできないものだというイメージを持っていました。根室に来て落葉広葉樹の明るい森を歩くと比較的ふつうに見ることができることに、たいへんな感動とカルチャーショックを受けたことを覚えています。ネイチャーセンターに隣接する自然学習林には、観察路にそって長さ百五十メートルの範囲に群落が見られます。ちょうど、群落の中央を貫くように観察路がのびているわけですが、今年の春にその観察路から左右五メートルの間にある株数を調べたところ、三百株ほどのフクジュソウが確認できました。群落全体の規模としては、百五十メートル×五十メートルくらいですので、単純に計算すると三百株×五倍で千五百株くらいが生育しているということになります。この数字が多いのか少ないのかは分かりませんが、その見事さは根室の貴重な自然財産のひとつだということは間違いないでしょう。

フクジュソウに続いて花を咲かせるのはミズバショウです。私は過去に一度だけ尾瀬沼を訪れたことがあり、そこで初めてミズバショウというものを目にしました。本州で生まれ育った僕にとって、その花は高嶺の花、高原の植物というイメージでした。しかし、ここでは水気のある場所ならたいていどこにでも、極端な事を言えばどぶにだっ



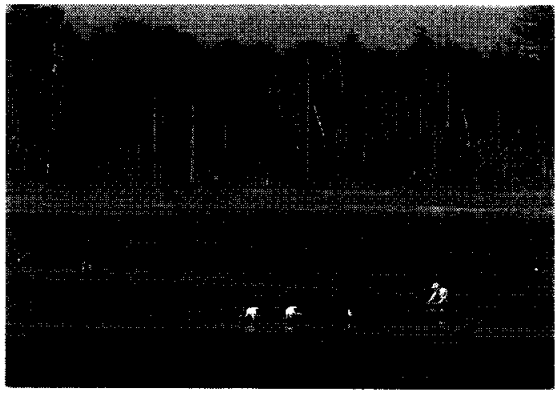
春・フクジュソウ

て咲いているのです。春国岱では苔むすアカエゾマツ林の林床から白い苞に包まれた花の塔が林立し、それはたいへん見事な風景です。こうした美しい野生の草花を目にすると、どうしてもそれを摘み取ってしまいたくなる、あるいは株ごとごっそりと掘り取って持って帰ってしまう人が後を絶ちません。礼文島やアポイ岳を始め、あちこちで高山植物の盗掘が絶えないことはとても悲しいことです。野の花はそれを育んでいる土地の地形や周りの植物たちとの絶妙なコントラスト、コンビネーションによってさらにその美しさが引き立つものです。野の花は野にあってこそ本来の美しさを楽しむことができるのではないでしょうか。また、花は植物が子孫を残すために必要不可欠なもので、植物にとっては命そのものです。そのことを考えれば、安易に花に手をかけることはできないでしょう。そういう意識の人が花とふれあうことで増えていってくれたらと思っています。

夏

フクジュソウ、ミズバショウに次いで、エゾエンゴサク、キバナノアマナ、スミレなど春の花が咲き始めるとともに、野山には小鳥たちのさえずりが響きわたるようになります。本州や東南アジア、遠くはオーストラリアからやってくる夏鳥たちも日に日に種類が増えていき、森がオオバナノエンレイソウで真っ白く色づくころ、春国岱は短い春を終え一気に夏の気配に包まれるようになります。春国岱を歩き始めて、まず最初に私たちを迎えてくれるのはヒバリたちです。早くも三月下旬に姿を見せる彼らは、ハマニンニクの草原の上空のあちこちで高らかにさえずっています。草むらではオオジュリンやシマセンニュウが顔を出したりひっこめたりしながら、自分のテリトリーをパトロールしているのでしょうか。

夏・ハマナス群落



夏・人とタンチョウ

展望台に上って春国岱を見おろすと、針葉樹の森に守られるように広がる湿原が目に飛び込んできます。目をこらすと白い点がひとつ、ヨシ原の中を動いています。タンチョウです。タンチョウは春国岱で3つがいが生活し、繁殖もしています。阿寒や鶴居村の給餌場で冬を過ごしたタンチョウのつがいは、毎年春に決まった場所に戻ってきてなわばりを構え、巣を作ります。巣作りの場所である天然の湿原が減っていく中で、北海道東部の原風景の残る春国岱は彼らタンチョウにとって貴重な繁殖地となっているのです。砂丘がハマナスの花で赤く色づくころには、茶色い綿毛に包まれた雛をつれたタンチョウの家族に出会えることもあります。

木の橋を渡って針葉樹の森に入っていくと、さまざまな小鳥たちのさえずりであふれんばかりです。おもしろいことに、本州でいえば平地林に暮らす鳥から標高二千メートルかそれ以上の場所でないと見られない鳥たちのコーラスを一度に聞くことができるのです。涼しげな針葉樹の森では、ルリビタキのやわらかなさえずりと金属的なエゾムシクイの声が特によくマッチしています。そのバックコーラスには、ヒガラ、ハシブトガラ、ゴジュウカラ、キクイタダキ、センダイムシクイ、アカハラが参加します。歌の替わりに木をタララララとたたいてアピールするアカゲラやクマゲラは、さしずめドラムスといったところでしょうか。

鳥たちの姿と声に向けられていた神経を、ちょっと足下に移してみると、緑色の苔の中からコミヤ

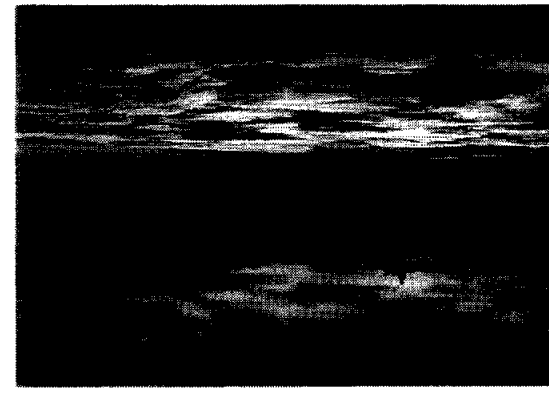
マカタバミやヒメイチゲ、ウスバスミレが白く可憐な花を咲かせているのに気づくでしょう。そして、苔に覆い尽くされてしまったアカエゾマツの倒木からは、次の世代が新しい命をのばしていることや、きのこが枯れ木を土に帰そうとしていることに気づくでしょう。

夏の春国岱は、こうした多種多様な生き物たちが創りあげた舞台であり、私たち観客をやさしく迎え入れてくれます。静かに耳をすまして目を凝らしていれば、舞台の奥深さを十分に堪能することができるでしょう。自然は何も語りかけてはくれませんが、その生き様をあからさまに見せてくれることで、輪廻転生、悠久の生命が現実にあることを教えてくれます。だから、人は自然の中に入るととても心地よい気分になり、古くなりかけた心が新しいものに変わっていくような不思議な感覚を味わうことができるのだと思います。机の上で自然の経済的価値や有用性を論じることも重要ですが、人にとってより大切なものが自然の中にはあるのだということを、自然と向き合うことで学んでいくことの方がずっと大切なことだと思うのです。

秋

エゾリンドウやサワギキョウなど、青紫色の花々が咲く頃、春国岱は秋を迎えます。夏の森の賑やかさ、草原の彩りの華やかさはすっかり影をひそめてしまいます。そして春国岱には紅葉がありません。秋は何も見るべきものがないように思えます。けれども、本当は秋が一番美しい季節なのかもしれません。森の地上を覆う苔は一年でもっとも緑濃く見えるようになります。夕日に照らされ

秋



秋・春国岱　夕景

黄金色に輝くヨシ原。その中を悠然と歩く三つ又角を持った雄鹿。エゾシカはこれから繁殖の季節を迎え、雌の群れを獲得するため角をからませ格闘する雄鹿たちの姿も見られます。

秋は湿地がもっとも賑やかになる季節です。シベリアで繁殖を終えたオオハクチョウやカモ、シギ・チドリなど水鳥が群れをなして渡来するからです。春国岱の周囲は水深が浅く、アマモなどの水草類が豊富で、潮が引くと広大な干潟が出現します。こうした浅瀬や干潟は、長距離を渡る水鳥たちにとってとても重要なエネルギーの補給基地なのです。オオハクチョウは毎年三千羽ほどが渡来します。風蓮湖全体では一万羽が渡来すると言われ、これは日本で越冬するオオハクチョウの六割に当たります。この他、カモのなかまが一～二万羽、シギ・チドリのなかまが三～四千羽、春国岱周辺を利用します。カモやシギ・チドリ類など小型から中型の水鳥は、肉食の鳥たちの格好の獲物でもあります。数百、数千という水鳥の群れに襲いかかるオジロワシやハヤブサのダイナミックなハンティング。怪我をしたものや群れからはぐれた弱い者が捕まり、淘汰されていく自然界の厳しい現実と、植物から水鳥、そして猛禽類へとつながる生態系の姿を目の当たりにすることができます。

秋、もっとも美しいと感じるのは夕日、落日の瞬間でしょう。真円の太陽が黄色、オレンジ、朱色、赤と色を変えながら深い森の向こうへ沈んでいきます。風がなく波のたたない日には、水面に空の色が赤く写し出され、その奥に広がる人工物など一切ない湿原と森がこれ以上ない美しい雰囲気を創り出すのです。

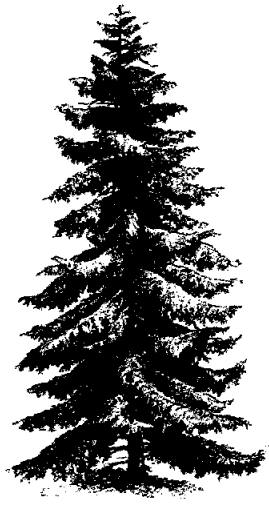
美しいものは儚いもの。急ぎ足の春と同様、秋はほんの一瞬だけ美しく輝いた後、長く厳しい冬へ主役の座を手渡すのです。

冬

春国岱を取り囲む湖面はすべてが凍りつき、草原もほとんどが雪で閉ざされる冬。春国岱は雪と氷の白い世界に変貌します。頬に吹きつける海風は、寒さよりも痛さを感じるほど冷たく、すべての命を排除するかのような厳しさを感じます。こんな厳しい冬でも、生き物たちは私たちが思っている以上に活発に動き、食べ物を探し、命をつないでいます。カムチャッカ半島などから渡ってくるオオワシは、春国岱で見られる猛禽類の中では最大で、世界でもっとも美しいワシと言われています。澄み渡った冬の青空をバックに、長さ二メートルを越す翼を広げ悠々と舞う姿は、すべての人を魅了させずにはおきません。彼らの主食は魚ですが、春国岱では湖が凍ってしまうために生きている魚を捕らえるというダイナミックな狩りの姿を見かけることはありません。湖では氷に穴を開けて網を入れ、コマイなどの小魚を取る漁が行われます。網を上げると、コマイのほかにカジカやギンポなどの雑魚もかかっていて、漁師はそれを網からはずして捨てていきます。オオワシはそれを知っていて、漁師が魚を置いていくのを待っているのです。漁場が見渡せる湖岸の木の枝に止まっているのはまだしも、漁場の周りの氷上に群れをなしている様は、給餌人を待つ猿の群れのようで、威風堂々たる横綱格から一気に前頭へ格下げしたくなる気分になります。とはいえ、そんな滑稽さも許せてしまうのは、彼らが生というものに必死にしがみつこうとしているからなのでしょう。風蓮湖に渡来するオオワシの数は八百羽。この自然の想像を絶する豊かさと包容力に思わず絶句してしまいます。

冬・オオワシ

どこまでも続きそうな白銀の世界を目の前にすると、無、という言葉が浮かんできます。視界の中には命のささやき声さえ聞こえず、耳にはただ風と波の音だけが入るだけです。足下を見て歩いていると、真っ白な紙に乱雑にスタンプでも押したような足跡が見つかります。キタキツネが何かを求めてさまよい歩いていたのでしょう。そこにはVサインを作った指先でちょんと雪の表面をつき、点と点の間から細い線を描いたような足跡も見つかります。キツネはネズミを探していたのです。何も無さそうな雪原でさえ、注意深く歩いてみると、私たちが立っているその時とは別の次元で、確かにそこに命が息づいていた証拠を見つけることができます。

最後に

自然と接するのに特別な能力は必要ありません。自然の中にいて、体に感じるすべてのものを受け入れようとする気持ちがいちばん大切なことなのです。自然の語り部たちは無口で時には無愛想かもしれませんが、それに目と耳を貸そうとしなければ、何も語りかけてはくれないでしょう。名前が分かるとか、鳥をすぐに見つけられるといった能力主義よりも、自然が語りかけてくるありのままを受け入れることができたなら、私たちは自然をもっと身近に、そして人生の大切な一部として感じることができるのではないでしょうか。春国岱の四季との出会いの中で、そんなことを教えてもらったような気がしています。